
図書委員会の恋愛事情

豆吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書委員会の恋愛事情

【Nコード】

N0670X

【作者名】

豆吉

【あらすじ】

泰斗高校図書委員会は共学なのに女子しかいない委員会。

メインカップルは第1章の二人ですが、メインの二人視点の話と視点を変えて図書委員プラス1の恋愛事情を連作風にしていく予定です。

視点は変わってもメインの二人の進展具合を、ゆるゆると織り込んでいきます。

前作同様だったり・のんびり・ご都合主義になると思います。

R15は、ほとんどないと思いますが念のため。

第1章：岡崎 涼乃の困惑－1（前書き）

ずばり、第1章の主人公の好みは私の好みでもあります（爆）。

第1章：岡崎 涼乃の困惑―1

私、おかざき岡崎 すずの涼乃は2年1組、部活はしてないが図書委員を2年連続務めている。

私の通う泰斗高校は有数の進学校だけど、服装に関しては制服を必ず崩さずに着用のことという以外に規定がないので、目立つ人というのは少なからずいる。

とはいえ、せいぜい茶髪にしたり化粧したりする人がいるくらいで、金髪とか緑、ピンクなんてお花畑みたいな人はいない。生徒自治がモットーだから、自分たちで規律を守るってことなんだろうな。

私はというと、一度も髪の毛を染めたこともないし顔のケアは日焼け止めくらいで化粧もしたことない。だいたい、お金を使うなら私は好きな映画や小説、漫画にお金をかける。

中学のときは、「オタク」と一部の目立ち男子から嘲笑されて辛かったけど、この学校には、人のことを嘲笑するヒマがある人間はひとりもない。頑張って泰斗に入学してよかったと心から思っている。

今日のお昼休みは、天気がいいので外のベンチでお弁当を食べる。おやつに調理実習で作ったマドレーヌもついているゴージャスさだ。「そういえば、涼乃見た？ 早川くんの机のうえのマドレーヌの山」と友人の川田 唯ちゃんが話し出す。

唯ちゃんは高校に入学してから「おかざき」と「かわた」で席が前後したことから親しくなった。唯ちゃんは背が高くショートカットの凛々しい女の子だ。調理部に所属している。

調理部は、ときどきモニタリングとして図書委員会にお菓子を提供してくれる。私たちは料理に対してアンケートに答える。

どうして、こんな協力関係ができたかというと、図書委員長の古

川先輩と調理部部長の長谷川先輩が親友同士だからだ。

「見た。さすが早川王子だね。貢物で机が見えなかったよ、恐るべし。」ぱくん、とマドレーヌを口に入れる。

うーん、上出来。おいしーっ。しあわせー。

「早川王子……って涼乃……確かにあの山は貢物だね」唯ちゃんは噴出した。

早川王子、というのは私が親しい人の前でだけ呼んでる名前で、本名は早川 圭吾といい、目立ち男子として学年でも知られた存在。髪の毛はやや栗色でスラリとしたうえに顔も目鼻立ちが整い、笑ったときに歯がキラリーンと輝いていても違和感のない顔立ちをしており、さらに背後にバラをしょっていても「ま、似合うからいいか」と思われる類のイケメンである。

性格もまた悪くないときた。そいでもってテニス部というまさに「テニ○リ」を具体化したような人なのだ。

なぜ、私が早川王子と密かに命名するに至ったかというと彼はとても女子にもてるからだ。

1年生のオリエンテーリングのときは彼のいる班に女子が殺到しちゃってなかなか決められなかったとか、バスの席決めでも女子同士がもめたとか、その手のエピソードで本が一冊できそうだ。“女子同士の揉め事の裏に早川あり”というのは既に定説となっている。

ああいう「いかにもモテまっせ」なタイプは苦手だな。私ほんとと端正な感じで、なおかつ白衣が似合うメガネ男子なら完璧だ。化学の橋野先生なんて私にとっては相当萌えだ。私は理系科目は苦手だけど、理系人間はすてきだー。なんてことを、お昼に唯ちゃんと話していた。

このとき私は、まさか早川くんに聞かれているとは思わなかったのである。

第1章：岡崎 涼乃の困惑－1（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

2作目を書いてしまいました（汗）。

しかも現代です。学生の頃なんて遠すぎて覚えてないのに・・・そのぶん、妄想でカバーしていきます。

ですので「こんなやついないし、納得できないし」と思われる方はスルーしてくださいね。

今回、思い切ってR15をつけてみたのですが、果たして作者が書けるのか？

一 2 (前書き)

涼乃、早川のことをこっそり「早川王子」と呼んでいたのがバレた
うえに逃亡の巻。

授業が終わると、唯ちゃんは部活に向かい、私は当番じゃないので家に帰る。

かばんを持って唯ちゃんと途中まで一緒に行くことにした。

ところが、帰ろうとする私を「岡崎さん」と呼び止める人がいた。振り向くと、そこには早川王子……もとい早川くんがいた。彼も部活に行くのかテニス部のバッグを肩からかけて私をじっと見てる。

「岡崎さん、これから少し時間ある？」

うーん、早川くんに費やす時間はないな……。なんてことは小心者の私は、もちろん言えず「少しなら。」と無難に答える。

唯ちゃんが「涼乃、なんかしたの？」とこっそり聞いてきたが、そんなわけないだろう。近寄りもしてないのにさ。

「わかんないけど……。唯ちゃん。時間迫ってるから部活いきなよ。」とささやきかえす。

「うん……。今日の夜電話するね」と唯ちゃんは部活に向かった。

いつの間にか、教室には私と早川くんの二人だけになっていた。もしや賭けか何かで、他に誰か隠れてるのでは？と私は思わず周りをきよろきよろしてしまった。

「なにしてんの？岡崎さん」

「え？えっと見事に誰もいないなーと思って。早川くんは部活行かないの？」

「今日は遅れるって部長に言ってるから」

テニス部の部長……。ああ、あの黒縁メガネが素敵に似合うあの人が。一本筋が通ってしゅっとした感じがいいよなあ。あの人も白衣が似合いそうだ……。早川くんとは真逆だな。

はっ、いかん。早川くんの存在を忘れそうになったよ。現実に戻らないと。

「そうなんだ。それで私に何か用でしょうか」なぜに敬語、私。

「あのさ、……岡崎さんはメガネ白衣が好きなの？」

げ。なぜそれを知っている。

びっくりした私の顔を見て、早川くんは「今日のお昼、俺、岡崎さんと川田さんがお昼食べてる裏に通りがかったときに聞こえちゃって。早川王子……って、俺って王子なの？」

このときの私の心境は「サ○エさんにいたずらがばれたカ○オ」いや「ママに0点のテストを発見されたの○太」もしくは……だめだ、おもいつかない。

「俺だって、別に好きこのんで、ああいう状況じゃないんだよ……」

「はあ……そっか。ごめんなさい。」自分のしらないところで変なあだながついているのに遭遇したら、不愉快だよなあ。私が全面的に悪いから、ここは謝罪だ。こっそり呼ぶのはやめないけどさ。

「いや……べつに謝らなくてもいいよ」

おお、笑った。なんとも思っていない私でも、なんだかまぶしいぞ。

「早川くん……それで、私に用ってなに？」

「岡崎さん。俺、岡崎さんのこと、1年のときから好きなんだけど、俺とつきあってくれない？」 早川くんは意を決したように私に告げた。

このとき、私がしたことは……再び誰かが見てるのではないかと、きよろきよろあたりを見渡したことだった。賭けでもなきや、こんなキラキラ王子がオタク女子に告白するか？ 漫画じゃあるまいし。

私は一瞬固まったあと、黙って早足で教室を出たのだった。

「え？ 岡崎さん??」と私の行動に呆然とする早川くんを残して・

•
•
○

— 2 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

涼乃、早川王子を置いて逃亡。それだけ驚いたということにしておいてください・・・

一 3 (前書き)

王子は意外と強引だったの巻

その夜、メールではなく電話してきた唯ちゃんに私は、あの出来事を話した。

あとは寝るだけなので自分の部屋でパジャマでごろごろしながら話す。

「ひゃー、なんだか私が帰ったあとにビックリな展開だね。」

「当事者の私は、もっとビックリだよ」

「涼乃。あんた、逃げたのはまずかったのでは」

「うお・・・やっぱり・・・だめ？」

「だめでしょう。明日、学校行ったら早川王子に謝りな」

「えー。早川王子にどうやって接触すればいいのさ」

「どう返事をするにしたって、はつきりさせないと早川王子が気の毒でしょうが」

確かに、あんな呆然とした早川くんは初めて見た。

次の日、「はー、どうやって早川王子と接触すればいいんだ・・・」と気が重くなる。

教室に入りクラスメートと挨拶をしながら、自分の席へ。

あー、どうしようかなーと机で頭を抱えてため息をついてると「おはよう、岡崎さん」と上から声がする。

見上げると、早川くん。今日も爽やかオーラが満載だ。

「おはよう、早川くん。」これは謝罪のチャンスなのは！！

「あ、あのさ、早川く「岡崎さん、今日の帰り、また教室に残れる？」早川くんは、もしかして謝罪のチャンスを作ってくれたのか。なんていいひとだ、早川くん！！」

「うん。大丈夫。」と私が言うのと、ほっとしたのか「じゃあ放課後」と自分の席に戻っていった。

さっそく、お昼に唯ちゃんに報告。

「唯ちゃん、今日の放課後に謝罪ができそうだよ」

「よかったね。ちゃんと謝るんだよ」

「うん」私は、朝のどんより気分がすっかり晴れて、爽快だった。

ああ、お弁当が美味しい。やっぱり食べるときには気分がよくな
いとね。

授業が終わり、私は約束どおり教室に残っていた。

早川くんは部長に断りでもいれに行ったのか教室にいない。私は
誰もいない教室で読みかけの文庫本を読みながら待つことにした。

「ごめん。待った？」と早川くんが教室に入ってきた。

「んー、そんなには。ちょうど読みかけの本が読めてよかったよ。」
そうだ、ここで謝ろう。「早川くん。昨日は、いきなり帰っちゃ
ってごめんなさい」私は頭を下げた。

「あ・・・あー、いいよ。驚いたんでしょう？いきなり聞いて」早
川くんが言う。

「でも、中途半端に帰っちゃったから、悪いことしたなあと思って
どっちにしろ、昨日聞いたことは断るつもりだったし」

「・・・理由、教えてもらってもいいかな」

「まず、私と早川くんの間に接点ないし。話したこともないのに、
いきなりのあれは驚くよ。それに、早川くんって華やかで気後れし
ちゃうし。私、平和かつ地味に高校生活送りたいんだよね」

「俺個人のことは、どう思ってる？」

「んー、よくわからない。さっきも言ったけど話したことないし。」

「じゃあ、よく分かるようになったら、考え直してくれる？」

「はい？」

「まずは、友達からだな。メルアドの交換しようよ。携帯は？」

「ええっ」

「ほら、赤外線で交換しようよ」

これは、イヤだといえない雰囲気じゃないか。私は渋々携帯を出

した。

「アドレス交換、完了。俺はあきらめ悪いよ？覚悟してね」
にっこり笑った早川くんは、王子じゃなくて魔王に見えた。
ど、どうしてこんな展開になったんだろう・・・。

— 3 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

王子のとった行動は涼乃を「困惑」させました。という事で「困惑」と題名につけてみたのですが・・・

次は違う人の視点で、その人の恋愛事情です。

涼乃が萌えだった「彼」です。

第2章：橋野 誠介の忍耐－1（前書き）

涼乃が白衣萌えだと言っていた彼視点の巻

第2章：橋野 誠介の忍耐―1

僕は泰斗高校・化学教師の橋野 誠介28歳、独身。通りかかった2年1組の教室で実に興味深いものを見た。

学校でも目立つ生徒の一人早川 圭吾と図書委員の岡崎 涼乃が二人だけで教室にいるのだ。

しかも、状況から察すると早川のほうが岡崎に告白したところらしい。

岡崎の顔が半ば呆然としたままなのは、いったいどういうことなのか。岡崎というのは図書委員のなかでも、いたってマイペースな性格で、あまり物事に動じるところを見たことないだけに逆に心配になってきた。告白じゃないのか？

「まだいたのか。もう帰りなさい」とりあえず、ドアを開けて声をかける。

「は、はいっ！」と岡崎はあせったようにあたふたと帰り支度を始めて慌てて出て行った。

早川のほうは部活に行くらしく、エナメルのかいバッグをななめがけして、のんびりと出て行った。

数日後。

「・・・・・・ということがあったんだよ。藤村はどう思う？」
ここは居酒屋。金曜日ということで店は混雑していた。

僕は、一人の女性と酒を飲んでいた。図書室に司書として勤めている藤村 恵理子。彼女と俺はかつて泰斗高校で同じクラスだった。二人とも母校に勤務しているわけだ。

「へえー。岡崎がねえ。ま、委員会のおきに気にかけて見てみるよ。」

僕がウーロン茶ジョッキを飲んでいる間に、藤村はビール↓ハイ

ボール↓芋焼酎水割りに突入している。顔は赤くならないし、状態も変わらない・・・こいつはザルだ。

同じクラスのときは、お互い気に留めることもなく卒業したのだが、大学卒業時のクラス会で再会したときにお互い泰斗高校に勤めることが判明して、それらしい二人で食事をしたりするようになった。

それにしても、高校のときはおとなしそうな外見と内気な性格で目立たなかった藤村。再会したときには「豪快な男前」に変化していたのには驚いた。藤村いわく「高校のときは内気でもよかった。大学に入ったら自分で動かないといけないと分かったから、頑張ってる」だけで、本質は変わっていないらしい。僕は、今の藤村のほうが好きだから、どっちでもいいけど・・・

そう。僕は藤村に片思いをしている。藤村も俺の誘いを断らないので嫌いではないと思いたい。が、僕がほのめかしても、こいつは全然気づきもしない。

「しかし、早川か」。岡崎、押し切られたのかもね。だって、岡崎の好みと真逆だもん、早川」

藤村は岡崎と好きな作家が同じとかで気が合うらしく、わりと色々話すらしい。教師とは違うから友達感覚で話せるんじゃないの？という藤村の分析だ。

「は？なんで藤村がそんなこと知ってるのさ」

「図書委員会のガールズトークで、“男性のどんな服装に萌えか”って話になってさ。へっへっへ。岡崎の好みはずばり、白衣メガネ理系男子。橋野なんかは「どストライク」でしょうね。橋野先生の白衣姿はいいですうとか言ってたもん。私も白衣メガネ理系男子は嫌いじゃないからさ、気持ちは分かるわね。橋野は白衣似合うもん」

なんつー会話をしてるんだ。・・・しかも、自分をちゃっかり

「ガールズ」に入れてるあたり、つつこんだほうがいいのか？

それにしても、普段はこういうことを言う人間じゃない。もしかして、酔っ払ってるのか。

「藤村、酔ってるのか？」

「はあああああ？酔ってるわけないじゃ～～ん。はしのつたらなに言ってるんだか」

・・・間違いない。よっばらい誕生だ。

「おい、出るぞ。送る」

「は～～い。わかりました～。さいふ～さいふ～～つと」

「あとで割り勘してくれればいいから」

「そお？わっるいわねえ♪」すでに出来上がりつつある藤村を連れて僕は店を出たのだった。

第2章：橋野 誠介の忍耐－1（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

この彼と彼女の話でR15を書きたいと思っています。
といっても、この章ではありません。

もうすこし後になってから予定しております。

一 2 (前書き)

橋野、ベタな状況で邪魔されるの巻

「ぎゃおおお!!」とおよそ色気のない声で、僕は目が覚めた。

昨日、藤村を僕のアパートに連れ帰って（彼女の家はちよつと遠いのだ）、自分のベッドに寝かせた。僕は、ソファで寝た。手を出すなら両者合意のうえじゃないとね。

「ここは、どこ??」とベッドでござそそしている音がする。

そろそろ顔を出したほうがいいかもしれない。

「おはよう。藤村。ここは僕の部屋で、ちなみにそれは僕のベッド」「ひゃおおう!! 橋野!! な、なんですと、橋野の部屋?」

「色気のない叫び声だなあ。そう、きのう藤村が酔っ払ってたから僕の家泊めたんだよ」

「そりゃゝゝゝ、すみません・・うーん、やっちまったか」頭を抱える藤村。

「服は・・着てるけど・・」

「酔っ払いに手を出す趣味はないよ」

「はゝゝゝ、そっか。じゃあ、私帰るわ。悪いけど、洗面所貸してくれる? せめて髪の毛をどうにかしないと、帰れないわ」と即ベツドから出ようとした藤村を思わず押し戻す。

冗談じゃない。僕はこのチャンスに自分の気持ちをきちんと打ち明けるつもりなんだから。

「あのさ、藤村・」

「ん?」押し戻されたことに驚いているようだ。

「僕は藤村が好きだよ。藤村はどう思ってる?」

藤村は一瞬固まったものの口を開いた。

「私ね、外見と性格にギャップがあるらしくてさ、いい感じになった人とも「なんか違う」って言われて。もー、恋愛面倒って思ってたんだ。自分自身を見てくれる人なんて、いないんじゃないかと」

「それで？」

「でも橋野はさ、私の性格が分かってても変わらないじゃない？それがともうれしかったんだよ、橋野」

「今の藤村の気持ちを教えてくれないか？」

「橋野のこと、すきよ」

「いま、しらふだよな」

「酔っ払って告白なんかしないわ」と顔を赤らめる藤村。

じゃあ、こういうことをしてもいいかな。両者合意のうえで・・・

・と僕は藤村を押し倒してキスをした。藤村もキスに応える。

そのまま、藤村も抵抗しなかったので、僕は藤村をいただこうとしたら・・・

ピンポーン。インターホンの音が室内に響いた。

これで、僕たちは我にかえった。あわてて身づくろいをし、藤村は洗面所へ。僕は玄関へ。

結局、この日は藤村と一緒に彼女の部屋へ行き、そのまま健全なデートをして、初めて「恋人同士」として過ごしたのだった。

早く彼女を食べてしまいたいけど、片思いが成就したからとりあえず理性を保ってる僕。

でも、そんなに待てないかもしれない。

「今度、白衣着て迫ってあげようか。」

「ばっ・・・ばかじゃないの???・・・ちよつと興味あるけど・・・」

— 2 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

橋野の「忍耐」が実ったのと、「忍耐」を試された話になりました。次は違う人の視点で、その人の恋愛事情です。涼乃の章に、ちょっとだけ名前がでた人です。

第3章：古川 瑞穂の再起－1（前書き）

図書委員長、片思いのまま失恋決定の巻

第3章：古川 瑞穂の再起―1

私、古川 瑞穂は学校で化学を教えている橋野先生に憧れている。先生の授業はわかりやすく楽しい。そして先生の立ち居振る舞いはいつもきちんとしている。

メガネの先生もすてきだけど、ときどき見かけるメガネなしの顔もすてきだ。

誰にもこの気持ちを言わないで、このまま卒業していくのは当たり前だと思っているけど・・・

だからと言って・・・神様。もしいるならあんまりだわ。

私はその日、参考書を見ようと駅に近い大きな本屋にいた。参考書も見たいけど、好きな作家の新刊もチェックしちゃうと、うきうきしていた。

土曜日の昼間は家族連れやカップルも多い。新刊はなかったけど、目当ての参考書を見つけた私は、カフェで一息つくことにした。窓際に座って、ぼんやり外を眺める。

すると、そこを通り過ぎていくカップルの中に自分の知ってる顔を見つけた。

橋野先生・・・隣にいるのは司書の藤村さん・・・二人は手をつなぎ楽しそうに話しながら歩いていく。そこにいるのは先生二人じゃなくて、男の人と女の人。

そういえば、二人は泰斗高校で同じクラスだったと藤村さんが言っていた。女子ばかりの図書委員会で蔵書の整理をしたりする日にはなぜか、必ず橋野先生が手伝いにきていた。

そっかー、そういうことか。ちえーっ。傷ついたわけじゃないけど、確実に私の心に苦いものが広がってゆく。

学校で図書委員長を務めているため、私は司書の藤村さんとは結構仲がいい。図書委員は皆、仲がよくて放課後の当番も全然苦痛じゃないはずなのに、今日はなんだか足が重い。

当番のため図書室に向かう途中で、ふと見た窓の外。私は同じ委員の2年の岡崎ちゃんが中庭にいるのを見つけた。彼女の横には、なぜか同じ2年生の早川くん。整いすぎた容姿で目立つ彼は最近、岡崎ちゃんに話しかけていることが多い。そういえば先週・・・と私は岡崎ちゃんの様子を思い出していた。

委員会のミーティングのあと、私は岡崎ちゃんに、最近、早川くんと一緒のところをよく見かけるけど仲良くなったのかと、軽い気持ちで聞いてみた。

「最近、女の子からの視線が痛いんです・・・うう。早川王子のせいです」と岡崎ちゃんは委員会のミーティングのあとに机にうつ伏せになった。ちなみに早川王子とは岡崎ちゃんが彼につけたあだ名で、図書委員の間で定着している。

瑞穂先輩、聞いてくださいと、岡崎ちゃんは「王子はいつもキラキラしてて、オタク女子の私にはまぶしすぎるんです。自分のことを知ってほしいってメールをくれるんですけど、私みたいな人間からすると何書いていいのか返信にも気を遣うんです」とぼやきっぱなしだったわけ。

今だって、話しかけてくる早川くんを、岡崎ちゃんは適当にあしらっている・・・ように見える。岡崎ちゃんは、友人を見つけたみたいで、早川くんに断りをいれて、さっさとそっちに向かったようだ。

岡崎ちゃんの話から察するに早川くんは彼女と「友達になるところから始めて、いずれは彼女に」って思ってたんだろうなあ。

「おい。なに庭をぼんやり見てんだ・・・なんだ、瑞穂も早川のフ

アンかよ」

横にきて話しかけてきたのは、この学校で生徒会長をしている平田 孝一郎。

「なんだ、孝一郎か。」橋野先生だったら、きっと土曜日に見た二人を思い出してしまう。

「なんだ、孝一郎か・・・なんて俺に対してそんな反応をするのはおまえくらいだ。瑞穂」

孝一郎とは家が隣同士で、幼稚園からなぜか高校まで同じという腐れ縁。しかも、昔から何かというこいつは私にからむんだ。

外面は優しい顔立ちで物腰もソフトなやつだけど、本性は俺様。会長になった時点で、たちまち独裁体制を整えた切れ者でもある。

「それで、お前はこんなところで何してる。今日は当番じゃないのか。」

「そうだ、当番！まったくあんたと話して、いらん時間を取っちゃったじゃない。じゃーね」と言い私は早足で図書室に向かった。

後ろで孝一郎が「・・・やっぱ瑞穂は鈍いよなあ」とつぶやいていたことを、私は知らない。

第3章：古川 瑞穂の再起－1（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第3章は、図書委員長の古川さんが主役です。

一 2 (前書き)

瑞穂、会長からお呼び出しの巻

図書室の扉を開けると、藤村さんと橋野先生がカウンターにいた。「古川が遅れるなんて珍しいわね。でも大丈夫、橋野先生がひまそうだったからカウンターに座らせといた」と藤村さんがニヤリとカウンターに目をやる。

おおう、カウンターに白衣姿の橋野先生。岡崎ちゃんがいたら「ひよほーい」と心の中でガッツポーズしそうだ。私もだけど。

「橋野先生、すみませんでした。交代します」

「助かった。どうして私のところに女子ばかり並ぶのかなあ。ところで藤村さん、私はそんなにヒマじゃありませんよ。たまたま資料を探しに来てつかまつただけです」と言い、橋野先生はカウンターから離れた。

並んでいる女子の皆さん、すみません。あなたたちからの「なぜ、もう少し遅れてこない」という怒りのオーラを感じてます。ええ、そりゃもう。早川くんに押されてる岡崎ちゃんもこんな感じなんだろうか……。

並んでいる人たちの貸し出しをすませ、図書室は少し静かになった。

「今日は、なんだか女子生徒の貸し出しが多かったですね。」

「短期間で、あんなに女子を集めるなんて。ねえ古川、橋野先生って「憧れの先生」ってやつ？」

「まあ……確かに人気のある先生だとは思いますが……私は憧れてます……」

「へー。それなら時々カウンターに座らせようかな。図書室が活性化しそうだ」

「……私は客寄せパンダですか」

「おおっと。まだいたんですね、橋野先生」

「カウンター手伝ってくれたら、探すの手伝ってあげるからさーっ

て言ったのは藤村さんですからね。さっさと手伝ってくださいよ」
いつもと変わらないように見える二人の会話だけど、やっぱりどこか違うんだよね。そして悔しいけど藤村さんも私好きだし、お似合いだよなあ……

「これ貸し出し」と目の前に孝一郎が本を片手に現れた。

「はい……っと、学生証出して。」学生証のバーコードと本のバーコードを読ませると貸し出し完了。

「図書委員長。図書の件で話があるので、あとで生徒会に来るように。」孝一郎が会長仕様で告げた。

なんだ？もしかして、この間の購入書籍リストに不満があるのか？

あれは、藤村さんと図書委員たちがせっせと頭ひねって作成した努力の賜物なんだ。孝一郎にとにかく言われる筋合いはない。

「わかった。あと30分くらいで終わるから」というと、孝一郎は手をひらひらさせて図書室から出て行った。

図書室の受付時間が終わり、私は生徒会に向かった。

「失礼します」と入ったものの、いるのは孝一郎だけだ。孝一郎はパソコンを見ていたが、私に気づくと「そこに座れ」と椅子を勧めてきた

「孝一郎、あんたのしもべ……じゃなくて他の役員は？」

「今日は生徒会の仕事はない」

「は？じゃ、なんの用なのさ」

「とりあえず、紅茶でも飲めよ。」と孝一郎は紅茶を出してきた。

— 2 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

おかげさまで、3000PV突破しました。

視点がくるくる変わる作品なので、いささか分かりにくい作品だと思いますが、引き続き楽しんでいただければ幸いです。

一 3 (前書き)

瑞穂、流される？の巻

「おまえさ」と孝一郎が口を開いた。

「なに」

「橋野のこと、好きだろう？」

「は・・・はぁ?!」なぜにこいつが知っている! しかも先生を呼び捨て!!

「だけど、橋野は藤村さんと付き合ってるよな。」

恐るべし、生徒会長。どこから、その情報仕入れた。

「おまえが橋野を見てるときの顔が先週とは違う。なんだかおまえ、泣きそうな顔をして二人を見てるし、分からないわけがないだろうが」

泣きそうな、顔・・・?

「瑞穂は昔から、外で我慢して家でこっそり泣いてるだろう?ここは俺しかいない。泣くとすっきりするぞ・・・俺のまえで、我慢するな」

「ばっ・・・」私は笑おうとしたんだけど・・・目の前の孝一郎がぼやける。

私は涙を流していた。傷ついてないなんて嘘だ。私は橋野先生が好きで、相手の藤村さんも好きで。二人はお似合いだけど、見るのは辛いし、くやしい。私だってきつと好きな気持ちには負けてなかった・・・だけど、先生は藤村さんを選んだんだもん。

「・・・」私はひたすら涙を流し続けた。孝一郎は、そんな私をなぐさめるでもなく、黙ってパソコンで仕事をしている。

私の涙が出尽くしたのが分かったらしく、孝一郎は黙って2杯目の紅茶を入れてくれた。

「飲んだら帰るぞ」

「うん・・・ありがとう」

「少しはすつきりしたか」

「うん。なんか、これから二人を見ても・・・前みたいにしてよう
って思えるようにがんばる。ありがと、孝一郎。あんたって、いい
人だったんだね。」

「・・・おまえは、俺をどう見てたんだ」

「外面のいい俺様」

「・・・」がつくりとする孝一郎。

「どしたの？孝一郎。」がつくりする孝一郎なんて、最後に見たの
はいつだったか。

「まったく・・・瑞穂。俺は、自分にメリツトのないやつとは付
き合わない。でも瑞穂だけは違う。わかるか、この意味が」

「幼馴染だからでしょー。」

「おまえ、どんだけ鈍いんだ」

「むー。なによ鈍いって」私はちよつとむかつときた。

「失恋したばかりのおまえに、つけこむのはどうかと思ってたけど・
・・・もういい。瑞穂、俺と付き合え」

「は？付き合う・・・どこに？今からじゃ遅くなっちゃうじゃん」

「今度は天然かよ・・・付き合うというのは、彼女になれというこ
とだ。わかったか鈍感瑞穂」

「は・・・はぁー?! あんた、彼女いたでしょうが。近所の女子高
の子」

「3ヶ月前に別れた。瑞穂が俺のことを男として認識してないのは
分かってたから、言い寄ってきた人間と付き合い合ってきただけだ。」

「あんた・・・サイテー」

「サイテーで結構。鈍すぎるお前が俺に目を向けるのを待ってた俺
がバカだった。」

「は・・・?」

「とりあえず、お互いのメルアドは知ってるし友達としては認識さ
れてるからな。・・・あとは彼氏彼女になるだけか」

「えー、あんたみたいな俺様やだよー。私はもつと穏やかな人かい」

「お前には俺がぴったりだ。俺にはお前がぴったり。……理想的だろう。失恋の傷を癒すには新しい恋が一番だからな……俺で手を打て。」

確かに孝一郎は嫌いじゃない……でも、私流されちゃっていいのか??

とはいえ、さっきの孝一郎の優しさにぐらっときてしまったのも事実。

「大事にするから、瑞穂。俺にしておけよ。」と孝一郎。

いつの間にか、片思いのまま失恋したことよりも、目の前の孝一郎にどう対応したもんだか考えてしまう私であった。

一 3 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

瑞穂の「再起」。いかがでしたか？

第4章：早川 圭吾の奮闘－1（前書き）

王子は実はヘタレなのか？の巻

第4章：早川 圭吾の奮闘―1

彼女をはじめて見たのは、入試のときだった。俺の隣の席に座った彼女は緊張感たっぷりの教室で、深呼吸を始めたんだ。

俺はノートを見直しながら、その様子を眺めていた。すると深呼吸を終えた彼女はぼそりと「うしっ」と言った後ヘラリとした。そのヘラリとした顔が、とても可愛かったんだ……

一緒に受かるといいな……入学したら絶対見つけてメルアドを聞くんだと思っていた。

あれから2年……好きな子じゃなくて、全然なんとも思っていない子しか近寄ってこない。

1年生のときのオリエンテーリング、修学旅行、体育祭、文化祭……1、2年生はクラス替えをしないのに、何も有効な手立てが見つけられない俺ってヘタレ。

「はー、どうすりゃいいんだか」俺は理系希望だから3年になったら理系を選択する。岡崎さんは文系クラス志望らしい。つまり来年はクラスが別なので、今年は最後のチャンスなんだ。

昼飯を食べた後、校内にある芝生に通りかかったとき岡崎さんの声が聞こえた。……ショックだ。俺は彼女いわく「いかにもモテまっせ」顔で、好きじゃないらしい。化学の橋野じゃ、俺と全然違う。しかも、俺のこと「早川王子」って呼んでるし。

しかも、彼女とのきっかけになれば、と放課後に話をしたついでに告白したところ、表情が固まったまま逃げられたし。もっとも、次の日には謝罪ついでに告白を断ってきた彼女を押し切って強引にメルアドを交換した。なんともいえない表情の彼女を目の前にして、俺はとにかく自分の存在をアピールすることにした。

俺はさっそく彼女に初メールをした。メルアドを交換したので送ってみたことと、自分にも送ってくれるとうれしいという文面で送った。ほどなくして、岡崎さんからメールがきた。

「メールあんまりしないので、時間があったら送ります」・・・短い上に、そっけない。絵文字もない。なんとなく岡崎さんらしくて笑ってしまった。

その1週間後、先生に頼まれて集めた課題を抱えて歩く岡崎さんに走って追いついた俺は固辞する彼女を押し切って課題を半分持って職員室に向かった。

課題を先生に届け終わり二人並んで廊下を歩く。ううう、夢みただ。

「早川くん、半分持ってくれてありがとう。一人で持ってくってさっきは言っただけ、やっぱり重かったから助かったよ」

「どういたしまして。今度からああいうときは声かけてよ」

「んー。考えとく」どうみても断る気満載のニュアンスで答える岡崎さん。

「ところでさ、今日部活ない日だから一緒に帰らない？ 岡崎さん」

「ごめんね。図書委員の当番でムリ。じゃーね、早川くん。あ！唯ちゃん」と川田さんを見つけた岡崎さんはそっちに走っていった。

岡崎さんに声をかけられた川田さんは、俺の姿を見つけると気の毒そうな顔をして俺を見た。

な、なんの！勝負はこれから。とりあえず「接点ない人」から「アドレス知ってるクラスメイト」に昇格したのは間違いないし、返事はそっけないけどメールすればきちんと返信をくれる岡崎さんの丁寧さが俺は結構気に入っているのだ。

第4章：早川 圭吾の奮闘－1（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

王子の「奮闘」が、皆様に伝わるとうれしいです。

一 2 (前書き)

王子、涼乃に翻弄されるの巻

今日は部活がないので、俺は放課後に図書室に行ってみることにした。話しかけるチャンスがあるかもしれないじゃないか。

図書室に入ってみると、そこは静かで落ち着いた空間だった。大きいテーブルが並べてあり、そこで課題を済ませたり読書をしたり、みんな思い思いに静かに過ごしている。

カウンターを見ると、司書の人だろうか、髪の毛をくるりとまとめてアップにしている人と岡崎さんが座っている。書棚に戻す本がある程度たまったらしく岡崎さんが席をたち、ワゴンに本を並べ始めた。もしかして、話しかけるチャンス!!

「岡崎さん」後ろから声をかける。

「!？」とちよつとびくつとした彼女は振り返って俺を見て「なんだ・・・早川くんか」と安堵していた。

「これから本を戻しに行くの？」

「そう。早川くんも手伝う？ なんてね」図書室は彼女のテリトリイなのか、いつもより俺と会話をしていても気楽そうだ。

「いいよ。重そうな本もあるし、手伝うよ」

「えー、いいよ。そういえば私、早川くんを図書館でみたことないや。本を借りるなら学生証が必要だよ。」

「そうなんだ。知らなかった。」

「そっか。じゃあ今日覚えたね。よかった。」と岡崎さんは笑う。図書室に来たことがないということで、こんなに恥ずかしく思ったことが今まであっただろうか。いや、ない。

「これからちよくちよく来ようかな。だから岡崎さんの当番の日を教えてくださいなと嬉しいな」

「部活さぼると、部長に怒られるよ。そうだ、来た記念に何か読んでいったら？で、それを“早川くんも感動”とか“早川くんも納得の面白さ”ってオススメ図書にしちゃうからさ」

「それって、捏造じゃ・・・」

「本当に読んで感動したり、面白いと思えば捏造じゃないもん。だから、何か読んで面白かったら教えてよ。藤村さんに言って宣伝コーナーに入れちゃうからさ。藤村さんも、他の委員も喜ぶ♪」

「俺は、図書委員会の宣伝担当かよ」

「ぷっ。橋野先生みたいなこと言う〜」・・・そういえば、オススメ図書コーナーに“化学の橋野先生も感涙”とかコピーがついてる本があったな。・・・こういう仕組みだったのか・・・

どうせ家に帰ってもランニングしたあと勉強だけだし。息抜きに何か読んでいくかな。それに閉館までいれば一緒に帰れるかもしれない・・・。

「じゃあ、閉館まで本を読んでるから、俺と一緒に帰ろう？その代わり読んだ本を宣伝コーナーに入れていいからさ。どう？」

岡崎さんは一瞬固まったが、ぷっと笑って「委員会活動に協力してくれる人を邪険にはできないな。いいよ、一緒に帰ろう。ただし、駅までだよ。」やんわり釘をさすことを忘れない彼女は手ごわい。

「早川くんは、どんなジャンルが好きなの？」

「うーん。なんせ部活で帰ったあとに課題したりするのと眠くて。テレビもろくに見てない」

「じゃあ、前に見た見たドラマで好きだったものとかあった？」

「あ。あれ面白かったな。物理学者が事件を解決するドラマ」

「ああ。あれはよかったよね。主役の人の白衣&メガネ姿、たまらなかったよ。 “ 実に面白い ” とか “ 意味がわからない ” とか言われたいってTVの前で思ってたもん。ストーリーも面白かったし。でも最終回がいささか力技に走ってたのが残念だったよ」

・・・さすが岡崎さん。まずは白衣とメガネなのか。

「だったら、ドラマの原作を読んでみたらどうか。読みやすいからサクサクいけると思うよ。ちよつとドラマと違うところもあるけど、楽しめると思う。ちよつと返却されてきたから、どうぞ。」と彼女は俺に本を差し出した。

「へえ。じゃあ・・・読んでみようかな。学生証があれば借りられるんだよね」

「そうだよ。じゃあ、またあとでね」と彼女は返却ワゴンを押して行ってしまった。

はっ！俺、手伝うって言ってたはずなのに、うまくかわされたのか???

— 2 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

涼乃が熱く語っていたドラマは、ピンと来た方もいらっしゃると思いますが、月○の○リ○オです。もともとイケメンでいい声のあのお方が、あんなに白衣にメガネ&スーツが似合うなんてっ!! 原作も読んだ上に、映画まで見に行っちゃったじゃないか!!

涼乃同様「意味が分からない」とか「実におもしろい」とか言われたいゝと思っていた作者なのでした。

一 3 (前書き)

王子、若干のステップアップに成功の巻

勧められた本は面白くて俺は結局読みきれなかったので本を借りることにした。

「面白かったみたいだね。勧めてよかったよ。・・・で、コピーをつけてもいい？」とキラキラした目で聞く岡崎さん。

「・・・いいよ」

「藤村さん、早川さんのOKでしたよ。」

すると、司書の人もやってきて「ほんとにー？よくやった岡崎。早川くん、“早川くんも一気読み”ってコピーで展示するから、了承してね♪」

図書室の閉館を待つて、俺と岡崎さんは一緒に正門を出た。話をしていくうちに、二人とも最寄り駅が同じということが分かった。どうやら、俺は朝練で登校時間が早いため彼女と電車で会うことがなかったようだ。

「俺と最寄駅が一緒だね。家は駅からどのくらい？」

「徒歩5分だよ。駅前にマンションができたでしょう。あそこなの」それは、俺の家のある出口の反対側出口付近に建ったばかりの高層マンションのことだろうか。

「あの、駅前の高層マンション？」

「そうだよ。早川くんの家は駅からどのくらいあるの？」

「俺の家は、マンションと反対側の出口から歩いて10分くらいかな。」

「へー。反対方向なんだね。」

ここで話が途切れる。俺はまだ岡崎さんと話がしたいので話題を考えてるけど、彼女はぼんやりと外を見ている。

「あのさ、来年、理系クラスと文系クラスに分かれるけど、早川さんはどっちを選択する予定？」

いきなりの話題に、岡崎さんはいささか驚いたものの別に变と思わなかったようで、「文系かなあ。理系科目がちょっと苦手なんだよね。どうして数学や物理の問題を理系の人はあんなにすらすら解けるのかなあ。早川くんはどっちを選択するの？」

「理系クラスを希望してる。数学とか物理とか結構好きだし。」

「じゃあ、来年はクラスが別なんだね。」と岡崎さん。

岡崎さん・・・どうして来年はクラスが別とわかって「ちょっとほっとした感」を漂わしてるのかなあ。

たぶん、岡崎さんの思い描くような感じにはならないと思うよ。前も伝えたけど、俺、あきらめ悪いから。

岡崎さんと話をしてるうちに、最寄り駅に到着した。

「なんか、早川くんの印象変わったよ。早川くんは外見が華やかだから、性格もそうなのかなって思ってたけど、とても真面目なんだね。ごめんね、今までちゃらい人だと思ってたよ。」

岡崎さんは、悪いと思ったらちゃんと素直に謝罪できる女の子だ。やっぱり俺、岡崎さん、好きだなあ。偏見もたれてたのはショックだけ。

「誤解が解けてよかったよ。ところでさ、俺も涼乃って呼ぶから今度から俺のこと圭吾って呼んでくれない？川田さんレベルの友達として」

「ええっ。それはいきなりハードル高いっすよ・・・」と怖気づく岡崎さん。

「真面目な話もできる友達になれると思うよ、俺たち。」

「う・・・せめて圭吾くんにハードル下げてもらえないですかね。」

圭吾くん・・・それでもいいか。好きな子から呼ばれる自分の名前が、こんなに甘い響きだとは。

「じゃあ、今から圭吾くん、よろしくね。涼乃」

「ひゅ……はや……けいご、くん……じゃ、じゃあ私、出口こっちだから。じゃあね、また明日」

「じゃあね、涼乃。また明日」

俺は鼻歌を歌いたい気分で、家まで走って帰った。

どうやらマイペースな彼女に合わせて、長期計画で押していたほうがよさそうな気がする。

こんな感じで徐々に距離を縮めていけたらいいな……俺は改めて決意したのだった。

一 3 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

早川王子と涼乃の距離が少し近づいてきました。

第5章：平田 孝一郎の進展－1（前書き）

孝一郎、本格始動の巻

第5章：平田 孝一郎の進展―1

「おれはみずほとけっこんするーっ」

「えー、こういちらーはやだー。さくらぐみのひとしくんがいー」
・・・・・なんで、幼稚園の頃の夢なんかみるんだ・・・・・

俺は、平田 孝一郎。隣の家には幼馴染の古川 瑞穂が住んでいる。瑞穂と初めて会ったのは、俺たちが4歳のときに遡る。俺の家の隣に古川さん一家が引っ越してきて、まず母親同士が意気投合して付き合いが始まったんだ。

古川さん夫妻は共働きで、瑞穂は一人っ子。俺の家は父親が勤務医で、母親は専業主婦で子供は俺と弟。母親は幼稚園へのお迎えなども「一人も二人も一緒よ。瑞穂ちゃんは、ばっちり預かるから！」と遠慮する古川さん夫妻を説得して瑞穂を預かったんだ。

女の子がほしかった母は、瑞穂をそりゃ可愛がった。俺はというと、そういう境遇に別になんとも思わなかった。俺も、瑞穂が可愛かったのだ。ただし、俺の愛情表現は瑞穂の手のひらにカエルを乗せたり、靴に水をいれたり・・・とかなり歪んでいたが。

それで、夢で見たあの頃の思い出につながるわけだ。

今も、母は相変わらず瑞穂を可愛がっている。

「できれば孝一郎と結婚して、近所に住んでくれるとうれしいんだけどー」

「孝一郎君は優秀だから、うちの瑞穂じゃ物足りないんじゃない？あの子、ちよっとのんきだから」

「瑞穂ちゃんみたいな優しい子は孝一郎みたいな息子にもったいないわよ。瑞穂ちゃん、お嫁に来てくれないかしらね」

「たしかに孝一郎君なら瑞穂を安心して託すことができるんだけどね」

両家の母親が楽しげにお茶を飲んで会話しているのが聞こえる。2階にいる俺に丸聞こえということは、どんだけ声でかいんだ。

失恋して泣いてるあいつに俺の長年の思いを告白したのが2週間前。それから瑞穂は俺を避けている。まったく……。

ピンポーン。俺の家のインターホンがなった。

しばらくすると、母親の声で「あら、瑞穂ちゃん。孝一郎なら2階よ。あがってあがって」

「いえ……母を呼びにきただけです。」

「あらー、孝一郎に用事じゃないの。残念」

「えっと……」俺は瑞穂の声がしてるうちに1階へ降りていった。

「瑞穂」

声をかけられぎよつとした瑞穂。なんだか挙動不審だぞ……おまえ。

「あ、孝一郎いたんだ」

「いるさ。家で受験勉強だからな。瑞穂、勉強進んでるか？」

「う……うん。なんとか」

「息抜きでも行くか？」

「息抜き？」

「そう、これから外に出かけないか。お前何分でしたくできる？」

「えーっ！何それっ。私、お母さん呼びにきただけなのにー」

「つべこべ言うな。何分で準備できる？」

「……15分」

「よし。15分後に迎えに行くから、準備しに帰れ」

「……う……う……、分かったよ。じゃあね」押し切られた瑞穂は納得できない顔で戻っていった。

いつのまにか、母親が姿を消している。古川のおばさんの声もしない。普通に茶のみ話をしてくれよ。

俺が2階に上がる前に母親たちから声がかかった。

「デート？あんまり遅くなっちゃだめよ。あんたたち受験生なんだ

から」

「孝一郎君、瑞穂はあなたと比べて子供なの。その辺、よく考えてね？」

「・・・・・・この人たちの中で、俺はいつたいていどういう風に認識されているんだろうか。」

ともかく、瑞穂を外に連れ出して、避けてる理由を何としても聞き出してやる。

第5章：平田 孝一郎の進展－1（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

「第3章：古川 瑞穂の再起」のその後になります。

孝一郎視点で書いてみました。

瑞穂に対しては少し（？）強引な孝一郎です。

一 2 (前書き)

孝一郎は瑞穂が大切な巻

きっかり15分後、俺は瑞穂の家のインターホンを鳴らした。瑞穂の応対する声がした。

「俺。準備できたか」

「うん。今開けるよ」瑞穂はドアを開けて外に出てきた。

「どこか行きたいところはあるか」

「んー。特に・・・あ、噴水のある公園行きたい。天気いいし暖かいし。」

歩いて10分くらいのところに公園があって、そこはちょっとした噴水や、たくさんベンチがありちよつと散歩するのにちょうどいい広さなのだ。

「そうだな。途中で飲み物でも買って公園でのんびりするか」

ほんととは、ここで手でもつなきたいところだけど・・・こいつ、動揺すると長引くからなあ・・・ムリか。

暖かいせいか、公園には結構人がいる。俺はコーヒー、瑞穂はカフェラテを買ってベンチの一つに座った。

「図書委員の引継ぎ始めるのはいつだ」

「文化祭終わってからかな。生徒会は？」

「会長が出るやつが全部終わってからだから・・・こっちも文化祭のあとだな。」

「文化祭か。」

「今年、どうするんだ？」

「調理部と合同でやった読書カフェが好評だったから、今年もやるうってハセちゃんと話してるの」

ハセちゃんというのは、瑞穂の親友で調理部部長の長谷川 志保のことだ。のんびりした瑞穂に対して、しっかり&ちゃっかり者の

長谷川が部活の予算委員会で希望額をもぎ取っていく手腕は豪腕の一言に尽きる。

「読書カフェに今年も来てよね。で、面白いと思った本を教えてちようだい。“生徒会長も感動の1冊”とか言ってコーナーに飾るから」

「・・・最近、そのコーナーに“早川くんも一気読み”とかコピーのついた本が置いてないか？」

「岡崎ちゃんが、見事に彼を口説き落としてねえ。おかげで、その本の貸出率がものすごくって。」

その本を読んで面白かった人が他の本を借りていくパターンが出来る上がつてね、活性化してるよお。と暢気に笑ってる瑞穂。

「岡崎ちゃんといえば、“瑞穂先輩は生徒会長のことを普通に名前前で呼んで噂になったりしないんですか？”って聞かれちゃったよ。そういえば、私たちお互い名前呼びだよね」瑞穂はすっかり岡崎さんの相談役になっているらしい。

「そうだな。でも、今さら苗字でよぶのも気味悪くないか？」

「そうだよな。何より、私と孝一郎じゃ噂にもならないよ」

「当たり前だ。俺が潰してきたからな。」

「はっ？」

「実際、1年のときにお前と俺がそういう噂になりかけたことがあった。だけど、お前はそれを知ったら間違いない、俺を避ける。噂というのは、逆をたどっていけば大元にたどり着くからな。あらゆる伝手で大元を見つけて、そいつをあからさまに潰しておいた。1年の頃から生徒会にはいつていてよかったことの一つだな」

瑞穂を見ると驚いて声も出ないらしい。

「俺がそれだけのことをするってのは瑞穂との関係を大事にしたいからだ・・・だから、どうしてこの2週間俺を避ける？理由を教え

ろ」

「・・・避けてなんかないよ。孝一郎の気のせい」

「お前のその“気のせい”の言い方は、ごまかすときの言い方だよな。」

グッと詰まる瑞穂を見て、思わず笑いが出てしまう。まったく、何年瑞穂のそばにいたと思ってる？可愛すぎ。

— 2 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ものの言い方で、瑞穂がごまかしてるか分かる孝一郎って、どんだけ瑞穂溺愛なんでしょうか。
自分で書いててびっくり。

一 3 (前書き)

瑞穂、俺様に落ちるの巻

瑞穂はカフェラテを一口飲むと一息ついた。

「私、片思いだったけど橋野先生が好きだったの」

「うん」

「だけど、あの日、孝一郎が優しく流されそうになった」

「うん」

「でも、それは孝一郎に悪いと思ったから、ちゃんと考えようと思った」

「うん、それで？」

「今までも孝一郎には彼女がたくさんいたけど、でもいつも孝一郎は私のそばにいた。だけど、いつかそうじゃなくなったらどうしようって思ったら、橋野先生に失恋したときより、すごく辛くなったの。」

「そうか」

「うん。私、孝一郎とずっと一緒にいたい。……私、孝一郎が好きかもしれない」

好きかもしれないってなんだよ。自分の気持ちに自覚がないのか。告白にしか聞こえないのは俺の拡大解釈か？

「おまえ、俺のこと好きだろ」

「違うよう！！好きかもしれないって言ったでしょう！！」顔を赤くして否定するなよ……

「ずっと一緒にいたいなんて、瑞穂……そりゃプロポーズか？」

「は？何言ってるのよ！」

「プロポーズは、俺が瑞穂にするから、先にするな」

「はあっ？なんで、そこまで飛躍するの??」

「まずはお互いに希望の大学に合格しなくちゃな。俺、院にも行きたいから、その後就職して……そうだな3年後くらいで瑞穂を養

えるようにならないとな。待ってろよ。」

「待て?・・・どんだけ俺様。」

「今は・・・そうだな。一緒に“いろいろ勉強”しなくちゃな」とニヤリとする俺。

「勉強・・・そうだね、受験勉強しなくちゃ。」お、こういうのには引っかからなくなったのか。

いつの間にか、夕方になり少し肌寒くなってきた。

俺たちは公園から家に帰ることにした。めでたく「恋人同士」に進展したらしいので、俺は瑞穂と手をつないでみた。

瑞穂と手をつなぐなんて、どれくらいぶりだろう?俺の手も背も大きくなって、瑞穂の手だって子供から大人の女性の手に変わりつつある。

「ちょっと!なんでいきなり手をつなぐのよ。恥ずかしいじゃないの!」手を振り払おうとしてるから強く握って逃がさないようにした。

「彼氏と手をつなぐ彼女だぞ。ほほえましいじゃないか」

「それ自分で言う???ねえっ!」

手をつなぐだけで、この狼狽ぶり。腕をからめたり、その先へ行くたびにどれくらい瑞穂は狼狽しまくるんだろう。なんだか楽しくなってきた。

「瑞穂の初めては、みーんな俺がもらうからな。今まで彼氏いなかったのは知ってるし、これから俺以外いないから」

「な、なななな・・・」

「なんだ、ナスでも食べたいのか」

「なんてこと、言うのよ!!」

「誰も聞いてないよ。大声出すと目立つぞ」

あーあ、ここでキスでもしたいけど、したら確実に口を利いてくれなくなる。

ま、これから先いくらでも機会はあるからな。まずは変化した二人の関係を楽しむか。

「お前、夏休みはどうすんの？」

「えー、学校の補習授業と夏期講習うける。」

「そうか。俺もそれに付き合う」

「あんた・・・T大確実って聞いているけど」

「講習のあとにデートして息抜きすんの。な、瑞穂？」

「・・・わかった。」

瑞穂は、どう脳内解釈をしたのか「孝一郎はレベルが高いから、一緒に勉強すると成果がありそうだね。」とボケた発言をかました。

一 3 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

瑞穂&孝一郎がメインの話は、これで終わりです。

第6章は久々(第1章「困惑」いらいです)の涼乃視点になります。

第6章：岡崎 涼乃の心持－1（前書き）

涼乃、モヤモヤするの巻

第6章：岡崎 涼乃の心持―1

早川王子からの強引な提案「お互いに名前を呼ぼう」からずっと私は王子から「涼乃」と呼ばれ続けている。王子は、私が「早川くん」と呼んでも返事をせずに「圭吾くん」と呼ぶと返事をする。

制服が冬服から夏服へ変わる今、「涼乃・・・すっかり“早川くんが唯一名前で呼ぶ女子”認定されちゃったよね」と唯ちゃんが言うくらい、私はクラスで“早川くんの特別”扱いとなっている。

瑞穂先輩に至っては、「岡崎ちゃん、早川王子はクモで岡崎ちゃんは餌の蝶にしか見えないよ。わたし・・・」と肩をたたいてくれたっけ。

そんな古川先輩はいつの間にか生徒会長の平田先輩と付き合い合うようになり「付き合っているけど、幼馴染の頃と変わらない」と先輩は強調している。でも、先輩の当番の日には必ず会長が来て、終わるまで待って一緒に帰っていく様はラブラブカップルにしか見えない・・・と藤村さんプラス委員たちの間で見解が一致している。

前に「（俺のことを）よく分かるようになったら、考え直してくれる？」って告白を断ったと言われたけど、確かにあのときより、早川くんの人となりが分かってきたけど・・・だからといって、付き合い合うのとは違う気がするんだよね・・・放課後当番で人がまばらなのをいいことに私はぼんやり考えていた。

と、そこに早川くんが現れた。といっても彼は一人じゃなくて女の子と一緒に。

つやつやの茶髪をくると巻いて、女子高生に見えない大人っぽさ。足は長いし、すらりとしているし、顔もまっけはくるくる、唇はつやつやの美人さん。うーむ。私とえらい違いだ。

「涼乃先輩」と隣に居る1年の委員、武内 苑子ちゃん（あだな…そのぽん）が、声を潜めて話しかけてきた。

「どしたの、そのぽん」

「早川先輩の隣にいる、あの子同じクラスの桜井さんです。」

「へえー、桜井さんっていうんだ」

「彼女、早川先輩を狙ってるらしいんです。涼乃先輩のことも知ってて、絶対私のほうが早川先輩に似合うって言ってるのを偶然聞いてしまったんです。私、先輩に言ったほうがいいのか迷ってて…言えなくてすみません。」

「そのぽん、心配してくれてありがとね。でも、私と早川王子は恋人同士じゃないから。桜井さんも、そんなムキにならなくてもいいのに」

でも、なぜか心がモヤモヤする…。

私たちの声が聞こえたらしく藤村さんも「なにになに？」と混ざってきた。

そのぽんが同じ説明をすると藤村さんも「ほー自信家だねえ」と桜井さんのほうを見る。桜井さんは早川くんにならずと何か話しかけているようだ。

見たくないな。彼女じゃないくせに早川くん「何やってんのよ」って怒ってしまいそうだ。

藤村さんは、私の様子をみて「岡崎。ちょっと書庫の整理してきてくれない？ここに目録あるからさ」と10枚程度の目録一覧を持ってきた。

「岡崎、とりあえず書庫に引っ込んでなさい」肩をたたかれ、私はうなずく。

「先輩。桜井さんとは偶然一緒になったかもしれませんが。カウンターは私だけでも今日は大丈夫ですからっ」

自分の発言で、私が落ち込んだと思っっているそのぽんは、責任を感じているらしい。

「・・・書庫行って来ます」私は周囲に声をかけて地下の書庫に下降りて行った。

書庫はひんやりしていて、本に適切な温度で年中保たれている。実は私は図書委員のいろいろな作業のなかでも書庫の整理はトップ3に入るくらい好きだ。

私は早川くんのことを忘れて作業に没頭していった。

第6章：岡崎 涼乃の心持－1（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第6章は久々の涼乃視点です。

一 2 (前書き)

王子、涼乃のモヤモヤにニヤニヤの巻。

いつの間にか閉館時間になったらしく藤村さんが呼びに来るまで、私は書庫の整理に没頭していた。

「岡崎。閉館時間よ。」

「はい。すみません、1／4くらいしかできませんでした。」

「それだけでできれば上出来よ。あとは重そうなのがあるから、橋野先生がヒマな時間に合わせて委員みんなで整理しましょ。」

私は、橋野先生と聞いて、どうしても聞きたかったことがあるので藤村さんに聞いてみた。

「藤村さん」

「はい？」

「橋野先生と付き合ってるってほんとうですか？」

「は・・・？（ゴン）うお～～～いてえ～～」藤村さんはどうやら箱に足の小指をぶつけたらしい。

「藤村さん、動揺しすぎ・・・」

「え、なんで？ どうして？」

「図書委員は全員知ってます」

「どこで見られたんだか・・・」

「お似合いだと思います」

「生徒にそういうことを言われる日がくるとは・・・なーんか年取った気分・・・でも、内緒にしてね？」

「大丈夫です。図書委員はみんな口堅いです」

「それは・・・ありがとね。」赤くなったり青くなったりした藤村さんは、失礼だけどもかわいかった。

施錠した藤村さんと別れて私は正門へと急ぐ。早川くんは桜井さんと帰ったのかなあ・・・そう思うと、私は足取りが重い。

「涼乃」と前から走ってくるのは、早川くんだ。おや？ 一人だよ。

「圭吾くん・・・あれ、帰ったんじゃないの？」

「涼乃と帰ろうと思って待ってた。今日は、途中でカウンターからいなくなってたよね。どうしたの？」

「藤村さんに頼まれて、書庫の整理をしたの。つい没頭しちゃって・・・待たせたのならごめんね」

「そんな待ってないから、大丈夫。そういえば、今日は司書の藤村さんとカウンターにいた1年生の視線が冷たかったんだけど・・・なんでかな」

「・・・藤村さん&そのぽん!! あからさまな扱いをしすぎ!! 私には「さあ、わかんないや」と知らないふりをした。」

ところで、さっきから早川くんから甘ったるい香りがする。・・・面白くない。

「なんか早川くんから、甘い匂いにするね。」

とたんに早川くんが、眉をひそめる。王子は眉をひそめようが、唇とがらせようが(今はとがらせてないけど)イケメンだな。

「今日、図書室に向かっているときに、女の子がいきなり現れたんだよ。」

自分に自信があるんだろうなく、どうやら俺と涼乃の事を知っているけど“あきらめませんから”って言われちゃったよ。俺としてはあきらめてほしい」

どうやら、桜井さんとやはらは、なかなかきつつい人物のようだ。

あとで、そのぽんに聞いてみよ。

その前に、早川くん・・・私と早川くんの間には「友達」しかありませんが。

「桜井さんって、すごいね」と私は思わず彼女の名前を出してしまふ。

「涼乃、なんで名前知ってるの？」

「え、えーと。ちょうど圭吾くんが来たときに私もカウンターにい

たので・・・一緒にカウンターにいた武内さんと同じクラスらしくて。私と違うなーと思ってみた。」

「でも、俺がカウンターに行ったときは、いなかったよね」

「あのあと、すぐに藤村さんから書庫整理を頼まれたから」

「見てたなら、助けてくれてもよかったのに」

「えー。だってなんかモヤモヤしちゃって」

「モヤモヤ？涼乃がああ光景をみてモヤモヤしたの？」早川くんが、こっちを見て不思議そうな顔をしたあと、ちよつと嬉しそうな顔になった。

・・・私、今、何言った・・・？二人を見てモヤモヤ↓そのあとすぐに閉館まで書庫整理↓早川くんから香る甘ったるい匂いが面白くない・・・私、焼きもち？？うそーっ！

「そっかー、涼乃やきもち焼いてくれたんだ。うわー、ここまで長かったなあ♪」

たちまち上機嫌になる早川くん。

「ちがうよっ！ちよつと気になっただけ！！」

自分の失言を取り繕うことに必死の私。

私は瑞穂先輩の“早川王子はクモで岡崎ちゃんは餌の蝶”という言葉思い出していた・・・。

— 2 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第6章はこれで終わりです。涼乃の気持ちに若干の変化が現れ始めました。

第7章は大人の二人です。

ちよっとだけR15風味が登場です。

せっかくR15つけたので、生かさないと。

第7章：藤村 恵理子の情感－1（前書き）

藤村、恋人トークに自爆の巻

第7章：藤村 恵理子の情感―1

私の彼は泰斗高校で教師をしている。私は同じ高校の図書室で司書として働いている。

「職場恋愛」の私たちは、付き合っていることを誰にも内緒にしてきた……。はずなんだけど、なぜか図書委員の子達にはばれていたらしく、委員の一人で2年生の岡崎 涼乃から「お似合いだと思います」などと言われてしまった。

彼、橋野 誠介に、そのことを話すと「うわー、まいったねえ」などと全然まいってない口調で言っただけ。恥ずかしいのは私だけなのかよっ！と思わず突っ込みを入れたくなっただけど、ここは我慢だ。「誠介の口調は、全然まいってないね。私は岡崎から言われて「顔から火が出る」ってこういうときに使うのかって思ったよ」と思い出してまた赤くなってしまう。

誠介はちよつと考えて「知られているのは図書委員だけなんだろう？まあ、もしかしたら古川さん経由で平田くんが知ってるかもしれないけどさ。それに僕は、ばれても全然かまわないよ。恵理子はばれるのは嫌？」

「嫌じゃないよ。ただ……。恥ずかしいだけ」

「それなら二人で堂々としてればいい」と誠介は私の手を握った。

期末テストが来週から始まるせいか、図書室で勉強している生徒の姿が目立つ。

早川くんと友達らしい男の子が、岡崎と彼女の友達、調理部の川田さんが勉強中の隣の席について「4人で勉強しようよ」と言っているのが聞こえてしまった。……。早川くん、図書室ではもうすこし静かにしようね。

どうやら岡崎に怒られたらしく、シュンとしていた早川くんは、

申し訳ないけど犬がうなだれてるみたいで、かわいい。王子なのに犬キャラ。

別の机では平田くんと古川が勉強していた。学年トップ3の平田くんが、どうやら古川に勉強を教えているようだ。

別の日にも図書委員の子を何人も見かけた。・・・テスト、頑張っ
てほしいものだ。

夜に部屋でくつろいでいると、『テスト期間が終わるまで、忙しくて会えない。ごめん』とメールが来た。

『分かってる。無理して体調崩さないようにね』と返信してみた。すると、忙しいはずの誠介から電話がかかってきた。

「どうしたの？今どこ？」

「学校・・・規則でデータを学校から持ち帰れないからね」

「でも、もう21時過ぎてる・・・」

「大丈夫。もう少しで完成だから。・・・これが終われば、少し楽になる。」

「そっか。あまりムリしないでね？」

「あーあ、全然恵理子にさわれてない。」

「なんてことを学校で言うのよ」

「僕しかないから、いいんだ」

「テストがあけたら、たっぷりさわらせて？」

「誠介・・・切るよ」

「ごめん。でも、テストが終わるまで会えないのは寂しいよ」

「私もだよ。ね、テスト終わったら、休みの日にどこかへ出かけよう？」

「うーん、そうだね。じゃ、そろそろ切るよ。おやすみ」

「おやすみ」

うーん、まさに恋人トーク・・・私はなんだか恥ずかしくなっ
て「ひゃー」と一人で悶絶してしまった。私、何やってんだか。

第7章：藤村 恵理子の情感－1（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第2章：橋野 誠介の忍耐の続編です。

次、R15登場の予定です。

た、たぶんR15くらいだと思います。

一 2 (前書き)

がつつく橋野の巻
R15です。

期末テストが終わり、その週の土曜日に会って、そのまま誠介の部屋に泊まった。

私の体に絡まっている彼の手も足も、結局外れることなく二人は眠ってしまったらしい。

顔だけ彼のほうに向けると、どうやら起きる気配はなさそうだ。

「これは外れないわね。どうしよう」顔を違う方向に向ける。

目に入ったのは、散らばる衣服・・・久しぶりだったせいかな、誠介にむさぼられた感じ。

付き合うようになって3ヶ月。一緒に寝るようになったのは付き合ってからわりとすぐだった。

「うーん、それにしてもほどこけない」ちよっともぞもぞしてみろけど、は全然動かない。

「まだ起きる時間じゃないよ」と耳元に声と唇が触れてきた。

「ひゃっ・・・なんだ、起きてたの？」

「なんか、もぞもぞしてるから・・・目が覚めた」

「今、何時ごろかなあ」

「さあね。今日も休みなんだから別に気にしないでいいんじゃないの？それに・・・」

誠介はニヤリと笑って、私の体をさらにきつく抱きしめる。

「・・・まだ、足りない。」とさらに耳元でささやく誠介。

そして体が自由になったな〜と思ったら、今度は誠介が上から私を見る。

「ベッドから出ようなんて、思わないよね？」

ほんとーは、お風呂とかに入りたいです。でも、こうなったら誠介は絶対に離してくれない。

誠介はうれしそうに、首筋からどんどん下へ唇を移動していく。手は私の体のあちこちをさわってる。その手はいつものように私の弱いところを的確になぞってく。

私はそれが気持ちよくて思わず声が出てしまう。すると誠介はますますうれしそうに、私の体のあちこちをさわる。

誠介の唇が再び、私の顔に戻ってきて深くて長いキスをしてくれる。

それが合図で、私たちは、深くつながっていく。

二人でそのままベッドでまどろむ。

「そろそろ、お風呂入ろうか。恵理子、入るだろ？」誠介が起き上がり浴室のスイッチを押す。

「うん。・・・今、何時？」と私も起き上がる。

「10時。一緒に入る？恵理子」

「誠介と一緒に入ると、いつも恥ずかしいことするからやだよ」

「それを言うなら気持ちよく、じゃないの？」とニヤニヤする誠介。

「誠介はがつつくのね」

「そうだよ。恵理子限定でね」

そこでギュッと抱きしめられたら、もう動けない。

一 2 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

R15のつもり・・・なんですけど、楽しめましたでしょうか。

一 3 (前書き)

なんだかんだで甘い週末の巻

お風呂から出て、私は誠介の部屋においてある服に着替えて軽くメイクもする。

お互いの部屋に、それぞれ相手が自分の服や小物を置いていく行為は、まるで部屋を侵食しあっているみたいだ。

「冷蔵庫見てもいい？何か適当に作るよ」

「いいけど・・・何かあったかなあ。この2週間、期末テストの問題つくったり会議あったりで外食続きで家で食べてないんだよなあ」

私は冷蔵庫を開ける。

見事に何もない。ハイボール缶二つ（誠介は飲めない）、きつと私用である）、バナナ（誠介の朝ごはんその1）食パン（朝ごはんその2）、卵2個。それと、野菜ジュース、お茶、ポット型浄水器。

「野菜がないねえ」

「最近、買い物も行ってないからなあ」

「買い物して、何か作って食べない？」

「そうだね。買い物に行こうか。」

パスタを食べようという話になって、野菜やパスタ、それぞれの好みのソース、他の食料品を購入し帰路につく。

家でパスタを食べつつ、誠介のこのところの忙しさの話を聞いていた。

すごいハードスケジュールで驚いてしまう。

「一段落ついてよかったね」

「やっと恵理子と過ごせるわけだよ。もう長かった・・・」

そんな誠介が、なんだかとても可愛くみえて思わず髪の毛をなで

てしまう。

「僕は子供か？」

「うふふ。なんだかさっきの発言がかわいかったの」

「ふーん。じゃあ・・・」と私の手を取り、なぞる誠介。

誠介の考えが察した私は「だめ。私、家に帰りたいの。明日は学校でしょう。」とやんわり拒否をした。

すると誠介は「じゃあ、僕がスーツとか必要なものを持っていくから今日は恵理子の部屋に行くよ。明日は一緒に出勤しよう」と言い出し、私の部屋にいくことになってしまった。

そして、私はまた誠介に食べられてしまったのである。

・・・ 月曜日。なんとか誰にも見られずに学校へ来ることができた・・・よかった。

一 3 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

誠介&恵理子メインの話はこれで終わりです。

第8章は早川圭吾の奮闘パート2です。

第8章：早川 圭吾の奮闘2－1（前書き）

王子は欲張りの巻

第8章：早川 圭吾の奮闘2-1

1学期の期末テストも終わり、夏休みが近い。

来年は受験だから、今年から勉強に本腰をいれないと・・・とは思っているけど、なんとか涼乃との距離を「友達↓彼女」に縮めたいよなあとも思う。

最初は、俺が涼乃を名前呼びしたことでクラスでちょっとした騒ぎになった。現在はもう周囲も慣れ、涼乃が淡々としているせいかな誰も何も言わなくなった。

涼乃はメールだけじゃなく、最近は教室でも気軽に話をしてくれるようになったので、大きな進歩なんだけど・・・俺は欲張りだから、それ以上がほしい。

今日は、涼乃と一緒に帰れる日なので夏休みのスケジュールを聞いてみることにした。

「涼乃は、夏休みってどんな予定になってるの？」

「学校の来年の対策授業受けて、唯ちゃんや他の友達と遊んで、あとは母の店の手伝い。手伝うと8月のお小遣い3倍にしてくれるっていうからさ。夏から秋はいろいろ入用だから、稼がないと。」

「・・・ん？母の店？」

「涼乃のお母さんは、何かお店を経営しているの？」

「あれ？言ってなかったっけ。私の家、駅前のマンションにあるって言ったでしょう。あそこの1階で母がカフェを経営しているの」

「え。そうなの？」

「そうなの。ヒマがあつたら、ぜひ来てね。ところで、早川くんの夏休みはどんな予定なの？」

「テニス部の合宿と練習・・・あのさ、練習ない日に二人でどこか行かない？」

「二人で？」

「うん。友達だと二人で出かけたりするのは普通でしょ」

涼乃は、俺の発言に微妙な顔をしていたが、「いいよ」とわりとあっさり了承した。

よしっ！！よくやった俺！！涼乃と二人でお出かけ、よしっ！！

次の日から、俺は部活と勉強しかなかった夏休みが、涼乃とデートの予定が入ったことでがぜん楽しみになってきた。

部活の帰りにも仲間から「早川。なんか、いいことあったのか？」と勘ぐられるほどテニスも調子いいし、何より気分が最高潮。

「ん？別になにもねーよ」と言いつつも顔が笑ってしまう俺。

「なんだ、例の岡崎さんと、いいことあったのか？」と聞いてくる奴もいるが、無視だ無視。

教師から出される大量の課題にげんなりしつつも、俺の心は雲ひとつない快晴の空のようにすっきりしていた。

第8章：早川 圭吾の奮闘2－1（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第8章は早川 圭吾の奮闘第2弾です。

じれったい二人です……。じらしている作者がいうのもなんですが。

一 2 (前書き)

王子、映画に集中できずの巻

夏休み、今日は涼乃と会う日だ。
最寄り駅に到着したのは5分前。涼乃は既に待っていた。

ふんわりした紺色のブラウスにロールアップしたカーキ色のパンツをはいた涼乃は、ちよつと大きめのバッグを肩からさげて、文庫本を読んで俺を待っていた。

「ごめん、遅れた」

「そんなことない。私が早く到着したんだよ。」

「じゃ、じゃあ、行こうか。映画は何か見たいのある？」

「いちおう、パソコンでこれから行くところのスケジュールをプリントアウトしてきたよ」と、涼乃は俺に紙を渡す。

でも、題名だけ見てもさっぱり見当がつかないな。うーん、どうしよう・・・と考えていたら、涼乃が「私ね、いちおうスケジュールはプリントアウトしたものの、内容見てこなかったの。バカだよね」。だから、圭吾くんがよければ、実際に行ってプログラムをもらってから決めない？」とテヘへと笑った。

「いいよ。実は俺も内容がさっぱり分からなかったから涼乃が提案してくれてよかった」と俺も彼女の笑顔に釣られて笑った。

お昼を食べた後、映画館で検討した結果ハリウッド系アクション物にしてみた。

映画が始まったけど、隣に涼乃がいると思うと画面に集中するのが難しい。シートにちよつともたれて姿勢を変えたりとかそういうのが伝わってくると、ときどきする。

女の子と映画を見に行くなんて初めてじゃないのに、どうしちゃったんだろ、俺。

そういえば、涼乃は夏休みの課題終わったのかなあ・・・など

と俺は映画と関係ないことをぼんやり思っていた。

映画はちゃんと目では追っていたんだけど、ストーリーがよく分からないまま終わってしまった。

「映画、結構おもしろかったね。圭吾くんは、どうだった？」

「なかなかの迫力があつたね。車を使ったアクションとか」涼乃が気になってあまり見てませんでしたなんて言えないので、確かそういう場面があつたよな、と思って口にする。

「あゝ、確かに。すごかったよねえ！あと私、主演のマツチヨな捜査官よりも相棒の博士に目がいつちゃったよ。熱くなりがちな主人公に対してコンピューターの天才で冷静な彼！！いいよねえ」

そういうえば、そんなキャラクターいたなあ。・・・確か白衣にメガネだったような・・・。

「涼乃好みの白衣メガネだったね」

「そうだね。外見もだけど、キャラクターがツボだったよ。彼はなんという名前なんだろう。帰ったら調べてみよう」なんだかうれしそうな涼乃。

なんか面白くないなあ。俺が涼乃に気を取られてる間、彼女はしっかり映画を楽しんでる。

「あのさ、涼乃」

「はい？」

「俺、今日デートのつもりだったんだけど・・・」

涼乃はそれを聞いて顔が赤くなった。「そ、そっか。えと・・・そうだよな、デートだよな。」

二人の間に、沈黙の時間が流れた。

恥ずかしくなった俺は、急遽話題を切り替えた。

「あ！そうだ、涼乃は夏休みの課題どこまで終わった？」

「数学と物理のテキスト以外はメドがついた・・・でも一番苦手

なものを残しちゃったよ。」と涼乃はげんなりした顔をした。

俺はチャンスと思って「あ、じゃあ。今度、図書館で待ち合わせして一緒に勉強しない？」

「へっ。でも、圭吾くん部活は？」

「8月になったらテニス部は午前中だけになるから午後はあいてるよ。都合がよければ、どうかな」

「えっと・・・」

「俺、数学と物理のテキストはメドがついたんだけど、古文と英語が全然だめなんだ。涼乃に文系の科目を教えてもらえると助かる。

俺が涼乃に数学と物理を教える代わりにどうかな」

涼乃には、交換条件を持ちかけるとわりとOKが出ることが多い。どうやら彼女は、無条件で人に「してもらう」ことが苦手みたいだ。

「・・・お互い、助け合うってこと？」

「そうそう。」

こうして、涼乃と一緒に図書館で課題をすることが決定した。

— 2 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

王子の奮闘第2弾。

涼乃は映画をすっかり楽しんでいた模様。

次回は第9章で涼乃視点です。

第9章：岡崎 涼乃の一步－1（前書き）

体たらく涼乃の巻

第9章：岡崎 涼乃の一步―1

なぜか早川さんと一緒に課題をするはめになってしまった。

映画も、彼に「デートのつもりだったんだけど」と言われて初めて“おお、この状況はデートか”と気づいた私に、やっぱり早川さんの相手というのはハードルが高すぎる。

それにしても私みたいな“デート初心者”にも彼は優しかった。さすがだ。

ただ、映画だけで終わるはずが、なぜか課題も一緒にやる約束をしてしまったのは自分でもびっくりだ。どうしちゃった、私。

図書館までは同じ市内でも距離があるので自転車で行くことに決めた。早川くんも自転車だということで、一度駅のロータリーで待ち合わせをして二人で行くことにする。

早川くんが「涼乃を後ろに乗せたかったなあ」と言ったけど・・・二人乗りは違反だよ、早川くん。

図書館につき、座席をキープしテキストをひろげる。私たちは黙々とテキストを埋めていき、ときどき分からないところを教えあう。勉強の最中、ふと見る彼の勉強姿は、眼福の部類だろう。同じように勉強している女の子たちも、たまに彼を見てる。

そして、私をみてちよつと「ふっ」って笑うんだよなあ。気持ちいは分かる。

「どしたの？どこか分からないところでも？」 私の視線に気づいた早川くんがこっちをみた。

「ん？あ、何でもないっ。そろそろ一旦休憩しようかなって思っただけ。」

時計をみると、勉強を始めて1時間30分くらいたっている。

「そうだね。そろそろ休憩しようか。どこか一息つけるのかな。」

「あ、休憩室に自販があるよ。ベンチもあるから、そこで休憩しな

い？」

「いいね。そうしよう」 私たちは財布だけもって、席を立った。

休憩室はタイミングがずれたみたいで、誰もいなかった。

「圭吾くんは何を飲む？」

「俺は、コーヒー。涼乃は？」

「私はお茶」

それぞれ飲み物を購入して、ベンチに座る。

「涼乃、進み具合はどう？」

「圭吾くんのおかげで、順調だよ。どうもありがとう。圭吾くんは？」

「俺も。おかげでサクサクと進んでる。助かったよ。」

「もう少し勉強したら、何か食べて帰らないか？小腹が減っちゃって」

「うん。いいよ。頭使うとお腹すくよね」

「おう、すくよな」

私たちは、のんびり休憩したのだった。

第9章：岡崎 涼乃の一步－1（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第9章は涼乃視点です。

王子と涼乃の間を一区切りさせる予定です。

一 2 (前書き)

鈍感涼乃の巻

課題を予定通りに終わらせて、小腹のへった私たちはセルフうどん店に入ってうどんを食べていた。早川くんはてんぷらと稲荷とおむすびも食べてる・・・いったい、あのスマートな体のどこに入るんだろうか。

「圭吾くんのおかげで、一人でうんうん唸って考え込むよりずっとスムーズに進められたよ。どうもありがとう」

「俺のほうこそ。やっぱり苦手な科目って一人だとやる気でないし、涼乃と一緒にできてよかった。」

早川くんって、いい人だよなあ・・・私はつくづく思った。

私のどこがいいんだか告白までしてくれた奇特な人だ。それにメーラーのやりとりや実際に話してみると、普通に楽しい。

課題を一緒にしてから3日後。私は午前中に母の店を手伝ったあとに唯ちゃんと遊ぶ約束をしていたので、唯ちゃんに早川くんの映画や勉強会の話をした。

一瞬驚いた唯ちゃんは「涼乃、あんた早川のことどう思ってる？」と真面目な顔をして聞いてきた。

どう思ってるかって・・・うーん。「早川くん？最初チャラそうって思ったけど、話してみると結構いい人だね」と素直に答える。

「いいひと、ねえ・・・。そういえば早川にまわりついてる1年の女の子いたよね。」

「桜井さん？」

「そう。涼乃は、早川と桜井さんの二人を見たとき、どう思ったの？」

「・・・うーん、もやもやした。なんていうか、面白くなかった」

唯ちゃんはニヤリとして、「涼乃、それは嫉妬だね？」と面白そうだ。

「ううう。認めたくない……自分が焼きもちを焼くなんて」
私はうなだれた。

『いつも淡々とマイペースに』というのを心がけているのに、私、いつも早川くんに振り回されてる。

「涼乃、認めちゃえば？」

「なにを？」

「涼乃はね、早川くんのことを好きになりかけてるのよ。そっかあ。親友に彼氏が出来た日に来たのね。しかも早川王子かあ」

なぜかうなずきながら、一人で納得している唯ちゃん。

「好きに……なりかけ……」えっ。そうなのかな……ひょえ。そうなのかな。

私、……早川くんのこと、好き？

— 2 (後書き)

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

涼乃がようやく、自分の気持ちに気づいてびっくり。

一 3 (前書き)

自覚する涼乃の巻

第三者に言われて自分の気持ちが明確になることがある。

唯ちゃんに「涼乃はね、早川くんのことを好きになりかけてるのよ。」と言われたときの私は、まさにその状態で。

「同じクラスでも知らない人」のときだった早川くんは、女の子同士の揉め事を誘発させるチャライ奴ってイメージだった。だから最初に告白されたときは、ひたすら驚きと困惑しかなかった。そのあと、断りきれずにメル友となって言葉も交わすようになってから早川くんの印象はだいぶ私の中で変わってきた。

早川くんって、いい人なのに整いすぎた外見で知らないうちに偏見もたれるタイプなんだなあ、というのが今の私の認識だ。

話してみると、早川くんは外見こそ「王子」だけど中身は「普通の男の子」で、しかも真面目で他人に対して気遣いのできる人だった。

どうやら、いつの間にか瑞穂先輩いうところの「クモの餌」になってしまったみたいだ。

私、今、早川くんちゃんと返事をしないとイケないって思った。

ふとカレンダーを見ると、明日は来年の対策授業がある日だ。テニス部は部活があるのかな。

最近のメール履歴で一番多い早川くんのアドレスに私は「明日、私は学校で対策授業を受ける予定だけど、早川くんは部活？」と送ってみた。

すると、すぐメールではなくて電話がかかってきた。

出ると第一声が「なんで“早川くん”に戻っちゃったの」という早川くんの不満そうな声だった。

「……うっかり入力しただけだよ。」早川くん、見逃さない人だ……。

「涼乃、明日学校来るんだ。俺は明日部活あるし……授業は午前中？」

「そう。確かテニス部は8月入ると午前中だけだって言ってたよね」
「……朝7時から昼までだね。」

「……は……大変だね」

「で、どうしたの」

「うん、あのね……」ここで、用件を言おうとしたところ、早川くんは私の口調で察したらしく

「もしかして、返事？」

「う、うん。私、考えたの。で、あのね……」と言いかけたところ「待った」と早川くんからストップがかかった。

「え、なんで。」別に今返事をするわけじゃないんだけどな。

「明日、授業が終わったら正門で待っててくれる？一緒に帰ろう……あ、でも暑いから日陰がいいか……どこがいいかな」

「じゃあ……明日は確か図書室の開放日だから、先に着いたら中で待っててくれる？私も中で待ってるから」

一 3 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

第9章はあと1回で終了予定です。

閑話をはさみ、新たな視点となる人物が登場する予定です。

一4 (前書き)

涼乃、新たなプレッシャーがかかるの巻

対策授業を終えて、私は図書室に急いだ。

図書室に到着したとき、ちょうど反対側から早川くんが歩いてくるのが見えた。

私たちは、そのまま二人で帰ることにした。

雑談をしながらの帰り道、どうやって切り出せばいいのかなあ・・・。

学校と駅の間にある公園に差し掛かったとき、早川くんが「ちょっと寄っていく？」と私を誘った。

お昼が近いせいか、公園に人影はない。私たちは日陰のベンチに腰掛けた。

「涼乃」

「ん？」

「返事を聞く前に、俺から聞いていい？」早川くんは私をみた。

「なにを？」私も、思わず緊張してしまう。

「涼乃は、俺の印象って“よく知らない人”から変わった？」

「うん。変わったよ。早川くんは親切だし、話してると楽しいよ」

「あのさ、俺は今でも前と気持ちは同じだよ？涼乃のこと好きだし、彼女として付き合ってほしいって思ってる」

早川くんは真面目な顔をして私を見てる。私も返事をしなくちゃ・・・。

「あ、あのね。わ、私、私も・・・圭吾くんのこと、すきだから・・・その・・・」

そのときの私は顔が真っ赤だったに違いない。でも早川くんも、同じくらい赤くなっていた。

「ほんとに？俺の彼女になってくれる？」

「うん・・・」「地味で平和な高校生活」には程遠そうだけど、それでも早川くんと一緒にいると楽しいから・・・」

「俺、涼乃のこと守るから。」「地味で平和な高校生活」は俺だって望んでることだから。・・・ありがと、涼乃。これからよろしく・・・ぷっ・・・なんか俺、気が抜けちゃったよ。」

「こ、こちらこそお願いします・・・ぷっ・・・私も気が抜けた。」緊張がほぐれたのか、思わず二人で笑ってしまった。

「帰ろうか。腹へったな。何か食べて帰ろうか」

ベンチから立ち上がった早川くんが私に手を差し出す

「うん」と私は席を立つ。

「涼乃、手」と早川くんは私に手を出すように促す。

「？」私は何も考えずに手を出した。

すると、早川くんはいきなり手をつないできた。

「えっ!!」とビククリする私に、早川くんは「だって、涼乃は俺の彼女だもん。手をつながなくちゃね」とさわりと言っただけのける。

いきなり、手すか! さっき、お付き合いしようっていったばつかじゃなかった!

「それと」と早川くんはさらに続けた。

「圭吾くんも、よかったけど・・・俺のこと、呼び捨てで呼べるようにしてね」

圭吾くんと呼ぶだけで、私のHPは確実にプレッシャーで消耗しているというのに、さらに追い打ちかけるのか・・・この人。

— 4 (後書き)

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書いちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

涼乃&王子編、無事にハッピーエンドとなりました。

こんな感じでいかがでしょうか。

このあと、閑話が2話入りましてあと2人ほど図書委員の話を書く予定です。

涼乃&王子や以前にくつつけたカップルも

顔を出す予定です。よろしければお付き合いください。

閑話一 1. 川田 唯の観察（前書き）

唯ちゃんは見た！の巻

閑話－1：川田 唯の観察

夏休みが明けた9月。私の所属する2年1組にも、ちょっとざわつく出来事があった。まあ、私は知っていたので驚くほどのことじやなかったんだけどね。

“2年1組の早川圭吾に彼女が出来た。相手は同じ2年1組の岡崎涼乃。”この出来事がもたらしたのは、1組をわざわざ覗きにくるギャラリーの増加とクラスの団結だった。

1組の人間も早川くんが涼乃を名前呼びしだした当初こそ驚いたし、女子は涼乃に対しての嫉妬もあったと思う。だけど、そのあと早川くんの様子と、名前で彼を呼ぶものの早川くんを淡々とあしらう涼乃を見ているうちに、早川くんへの同情票が集まったのか『早く、まとまってくれ』と周囲の空気がなっていた。

そして、今回めでたく付き合うことになったと分かったときにはクラス中が暖かい視線を二人に送ったのだった。

めでたく付き合っている二人だけど、嬉しそうな早川くんに対して涼乃はたいして変わっていない。お昼だって、私や女子たちと食べるし、二人で話していても甘い雰囲気皆無だ。

「涼乃ってさあ、あんまり変わらないよね」お昼を食べているときに私はついつい彼女に聞いてしまう。

「はあ？」訳がわからん、という顔をする涼乃。

「ほらー、よく付き合うことになるよあからさまに校内でべったべたする人たちとかいるじゃん。そういうの、涼乃と早川にはないなあーと思って。」

涼乃は食べていた卵焼きがのどに詰まったらしく、急にむせだしたため私はあわてて涼乃にお茶を差し出した。

「唯ちゃん、何を突然・・・ゲホッ」咳き込んで涙目の涼乃。

「いやー、あまりに涼乃が淡々としてるもんだから、ちゃんと早川

と付き合ってるのを認識してるのかと心配に。」

「あーのーねー。そりゃあ私は鈍いけど・・・ちゃんと、認識してるよ・・・」涼乃は最後のほうは恥ずかしいのか声が小さくなっている。

私はどんどん赤くなっていく涼乃を見て思わず、かわいいーと頭をなでてしまった。

その後、私は早川くん「涼乃を泣かしたら、承知しないからね」とこっそり釘をさした。すると、早川くんから真面目な顔で「川田さんに頼みがあるんだ。涼乃が何か嫌がらせされたら教えてほしい。」とお願いされてしまった。

早川くん・・・それを知ってどうする気？私の疑問が顔に出ていたらしく「川田さん。涼乃は絶対、俺にそういうこと言わないでしょ。俺は涼乃に“地味で平和な高校生活”を送ってほしいだけだからさ。協力してよ」とにこやかに言われてしまったのである。

私はなんだか逆らえずにうなずいてしまった。

閑話一 1：川田 唯の観察（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書いちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

閑話その1：涼乃の親友で調理部の川田 唯の視点です。

いちおう、シリーズ化してるので時期はいつになるかわかりませんが

「図書委員会」編のあとは「調理部」編を予定しております。

そのときに、唯の話を入れようと思っております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0670x/>

図書委員会の恋愛事情

2011年10月21日11時03分発行